歴史地理学　48－1（227）45～60　2006. 1

近代産業景観をめぐる価値
—北九州市の高炉施設のナショナル／ローカルな文脈—

山　本　理　佳

Ⅰ．問題の所在と分析枠組み
（1）問題の所在と本稿の視点
（2）ナショナル／ローカルという枠組みにおける具体的問題
（3）分析対象と分析の手順
Ⅱ．高炉保存をめぐる概要
（1）製鉄所をめぐる時代背景
（2）保存にいたる経緯
（3）存廃論議の内容
Ⅲ．ナショナルな文脈への包摂
（1）高炉保存の具体化における住民の不在
（2）近代産業遺産の出現とナショナルな文脈
Ⅳ．ローカルな価値の投影
（1）様々な時代軸
（2）製鉄所と過去に対する批判的見方
（3）時代変革のシンボルとしての高炉
Ⅴ．ローカルな価値の再生産
（1）ローカルな視線と「保存」
（2）高炉への新たな価値づけ
Ⅵ．結論

Ⅰ．問題の所在と分析枠組み

1）問題の所在と本稿の視点

本稿での近代産業景観とは，近代期の産業活動の痕跡であり，特にその施設や空間という物的なものを指す。これらは近年，「近代化遺産」，「近代産業遺産」「近代土木遺産」といったカテゴリーで保存すべき対象として急速に注目されるようになっている[1)]。それらは全国的に拡がりを見せ，「日本の近代化に貢献したもの」と価値づけられ，体系化されている状況にある。ただし，Grahamほか[2)]や米家[3)]が指摘するところによると，文化遺産をめぐっては複数のScale（スケール）にもとづく価値や過去が重層している。こうした視点から，日本における近代産業景観の文化遺産化をとらえるならば，以下のような指摘ができる。近代産業景観は，もともとナショナルな次元での産業活動の中で生み出されたものであるが，すべて固有の地域に存在し，その景観には日常生活に根づいた地域からの視線が向けられている。そこに文化遺産としての価値づけがなされる場合には，「日本の近代化を支えた」としてナショナルな次元でまとめ上げられる一方，地域においては当然多様かつ独自の価値づけがなされているといえる。こうとらえる時，以下の２点が大きな問題として浮上する。第一に，近代産業景観に対する価値づけは，いかにしてナショナルな次元へと包摂されていくのか。そして第二に，それゆえ表面化しづらくなる，ローカルな次元での価値とはいかなるものか。

本稿は，こうしたナショナル／ローカルという２つの対立的重層関係を前提とすることで浮かび上がる，以上の問題を明らかにしていくことを目的とする。

キーワード：近代産業遺産，文化遺産の価値づけ，ナショナル，ローカル，北九州市

2）ナショナル／ローカルという枠組みにおける具体的問題

日本において，近代産業景観が有する文化遺産としての価値を対象とした研究では，堀川[4]や荻野[5]が地域（生活者）的な視線と他の様々な価値づけとの対立に着目している。堀川は「場所」と「空間」，荻野は「地域住民にとってのリアリティ」と「博物館的欲望」という枠組みや視点から，地域的視線と別の視線との対立をとらえた。ただし，近代産業景観が文化遺産としてとらえられる際，「日本の近代化に貢献した」という形で価値づけられる傾向にあることを考えると，地域的視線（ローカル）と対峙する視点に，「ナショナル」という次元を据える必要がある。

そして，文化遺産の価値づけのナショナルな文脈への包摂に関しては，文化遺産保護の制度的側面が重要である。Hoyau[6]が言及したように，そもそも国家の保護制度に組み入れられること自体が，ナショナルなレベルでの位置づけを生み出す。特に日本においては近代産業景観を文化遺産としてとらえる見方が，文化庁主導により1990年代に急速に普及した[7]。そのため，近代産業遺産にはナショナルな文脈の中でとらえる見方がより強化されているといえる。

また，日本における文化遺産を保護するシステムの変化も，ナショナルな次元へのベクトルを再強化するものであった。斎藤[8]によれば，1996年に導入された「文化財登録制度」は，国家による中央主義的なシステムを大きく転換し，いわば地域主導の文化遺産保護を可能とした。これは地域指定文化財への国からの財政援助が可能となったためであるが，この仕組みは1980年代末からの様々な地域文化振興政策によって既に成立していた[9]。近代産業遺産は，この公的措置を活用し，保存がなされていく例が多い。一見，これらの動きは文化遺産保護システムの地域主義化に寄与するものととらえられるが，岩本[10]は，「地域」を称揚しつつも，「日本という大きな物語へのつながりという回路を媒介させる」ものであると見る。実際に日本産業遺産研究会ほか[11]を見ると，近代産業遺産は「「その地域の人々の営みを示す」立派な遺産であり，日本の近代化を象徴する立派な文化財」とされており，地域における価値が結局ナショナルな次元での価値へと包摂されていることがわかる。

以上から，近代産業景観のナショナルな次元での価値づけが生み出される背景には，文化遺産保護をめぐる制度や政策があるとみることができる。そして，それが各地域において具体的にどのような過程を経ているかは，国内の事例ではまだあまり論じられていない。したがって本稿では，ある地域において文化財保護の制度的側面がどのように活用され，近代産業景観が文化遺産として組み入れられていくのかをとらえつつ，ナショナルへの包摂の過程を明らかにすべきと考える。

さらにローカルな次元で共有される独自の価値については，より明確に示すために，Debary[12]の研究を参考とした。Debaryは，地域独自の価値について特に時間的経過を含めて見ることでその全貌を掴みうる可能性を示唆した。つまり，単に文化遺産化した時期にのみ着目するのではなく，その後の地域における価値づけの有様をみることで，そこに一貫して見られるローカルな価値づけを明確に示したのである。この事例を踏まえ，本稿においても文化遺産化がなされた時期のみならず，時間的経過を経た後の価値づけの有様にも着目する。さらに地域社会においてはそれ自体が実在することによって，景観の可視的側面に独自の意味が付与されている可能性が高い。そのため本稿ではローカルな価値づけと景観の物的様相との関連についてもみることとする。

3）分析対象と分析の手順

本稿では，北九州市にある官営八幡製鉄所の操業開始に関係した産業施設「東田第一高炉」（以下，高炉）の保存をめぐる動きを事例として取り上げる。本事例は，1989年に存廃問題が起こり，5年間の論議を経て保存が決定した。その後保存整備がなされ，1999年に一般公開となり，現在に至っている[13]。1980年代末から1990年代にかけて，存廃論議から具体的保存へと至っていることは，ちょうど近代産業景観の文化遺産化が急速に進む時期と重なる。また，数年におよぶ論議を経ているため，地元をはじめとする人々の様々な価値づけが意識的に行われたことも，本稿がこの事例をとり上げた理由の一つである。

次のⅡでは，高炉保存に関する概要を製鉄所をめぐる時代状況，保存にいたる経緯，存廃論議から説明する。Ⅲでは高炉をめぐる一

表1　八幡製鉄所と東田第一高炉の変遷

年	八幡製鉄所の動向	粗鋼生産量（千トン）	従業員数	東田第一高炉 改修次（一吹き卸）	内容積（m³）	高さ（m）
1901	官営八幡製鉄所操業開始	11	2,787	(-'02)第1次	493.9	30
	八幡地区［東田］高炉建設開始					
1906	第1期拡張工事	134	11,150	第2次	479.8	〃
				(-'10)第3次	479.8	〃
1910		210	8,110	(-'15)第4次	440.0	
1911	第2期拡張工事	233	8,801			
1916	第3期拡張工事	472	18,221	(-'18)第5次	〃	〃
1919		438	24,191	(-'23)第6次	〃	〃
1924		687	25,787	(-'30)第7次	〃	〃
1927	八幡地区［洞岡］高炉建設開始	1,057	25,144			
1933		1,598	27,519	(-'40)第8次	468.6	〃
1934	日本製鐵株式会社発足	1,752	29,636			
1936	戸畑地区に工場設置	2,144	35,703			
1940		2,398	52,300	(-'45)第9-1次	455.6	〃
1949		1,054	39,123	(-'51)第9-2次	〃	〃
1950	八幡製鐵株式会社発足	1,466	38,284			
1951		1,816	40,334	(-'52)第9-3次	〃	〃
1958	戸畑製造所設置	3,064	34,637			
1962		5,602	42,220	(-'72)第10次	892.0	70
1963	（北九州五市合併（若松・戸畑・小倉・八幡・門司））					
1969	八幡地区から戸畑地区への集約決定	8,794	30,030			
1970	新日本製鐵株式会社発足	8,651	27,624			
1972	八幡地区［東田］，高炉稼動停止	7,757	24,917	稼動停止		
1973		8,301	23,757	東田第一高炉記念広場開設		
1978	八幡地区，全ての高炉稼動停止	5,470	19,116			
1987	戸畑地区，1基のみの高炉稼動体制へ	5,259	12,754	国際鉄鋼彫刻シンポジウム[1]開催		
1989		2,740	10,685	取り壊し方針発覚		
1990	スペースワールド[2]開業	3,852	10,008			
1999		3,570	3,666	整備後一般公開		
2003		3,910	2,779			

1）若手の芸術家が発起人となり，八幡の有力者が尽力し実現した企画。新日鉄が参加彫刻家10数人に一人30トンの鉄，および作業場・設備を無料で提供。国内外から鉄鋼彫刻家達が集まった。
作品展示が東田高炉記念広場で行われ，大きな反響を呼んだ。

2）新日鐵八幡製鉄所構内に設立された宇宙テーマパーク。新日鐵の複合経営（1987年の第1次中期経営計画以降）の1つ。

前掲注9）新日本製鐵㈱『新日鉄ガイド2004』，北九州市産業史・公害対策史・土木史編集委員会産業史部会1998『北九州市産業史』，聞き取り調査より作成

連の動きの中で，いかに高炉がナショナルな文脈に包摂されていったかについて示す。そしてⅣでは，ローカルな次元でとらえうる高炉の価値を，存廃論議中に語られた主張から明らかにする。さらにⅤでは，保存された高炉について，ローカルな次元でいかに価値づけられているのかを，主に保存に尽力した人々のインタビュー（2003年実施）をもとに明らかにする。

Ⅱ．高炉保存をめぐる概要

1）製鉄所をめぐる時代背景

東田第一高炉は北九州市八幡東区にある。1901年，官営製鐵所は当時の八幡村で，この東田第一高炉とともに操業を開始した。以後の詳細は表1に八幡製鉄所の動向としてまとめた。大まかに見ると，製鉄所は1934年に全国的に統合され日本製鐵株式会社となるが，1950年に解体され，八幡製鐵株式会社となった。その後1970年富士製鐵株式会社との合併で新日本製鐵株式会社（以下，新日鐵）が発足し，以後八幡製鐵所内の合理化が進んでいった。当時八幡製鐵所は八幡と戸畑の両地区にあり，八幡地区に東田，洞岡，そして戸畑地区と3つの高炉群があった。まず1972年には，第一高炉をはじめとする東田区域の高炉が稼動停止となった[14]。そして1978年には洞岡も停止され，八幡地区全ての高炉が稼動停止となった。さらに1987年には，新日鐵内の大規模な合理化で戸畑地区もその対象となり，八幡製鐵所全体で戸畑第四高炉1基のみの稼動体制となった。これにより生産量・従業員数ともに，新日鐵内で第1だった八幡製鐵所の地位は大きく後退した。こうした時代状況を背景として，1989年高炉存廃問題が起きた。

2）保存にいたる経緯[15]

高炉保存をめぐる動きは，反対派として当時管理者であった新日鐵，推進派として主に市，学界関係者，市民団体，芸術家，新日鐵OB，住民らが関わり展開された。表2がその詳細である。まず1989年に新日鐵が高炉を取り壊す方針であることが表面化した。以後1992年前半まで，団体や学会による保存要請，シンポジウム開催や新聞上での特集が組まれるなど，多くの人々が関与し保存に向けての活動が行われた。そうした動きと平行して，市は新日鐵あるいは文化庁と交渉を行っていた。これは，新日鐵の遊休地開発や補助金と密接に関わる文化財指定の問題など，市の都市計画や財政が大きく絡んでいたことによる。その後1992年後半，ある程度の合意が得られた段階で，市と新日鐵が共同で学識経験者らに高炉の保存に関する調査を依頼し，「東田第一高炉の今後のあり方に関する調査委員会」が結成され，話し合いが進められた。そしてその委員会が1994年6月に出した「保存すべき」との結論にもとづき，1994年11月に新日鐵から市へ高炉施設の管理委譲が成立し，保存が決定した。その後1995年2月に結成された「東田第一高炉保存調査委員会」で具体的な保存計画が検討され，同年12月に報告書が出された。そして1996年3月，市の史跡として指定され，地域文化財保全事業として旧自治省より75％の補助金を得て整備され[16]，1999年に公開された。

3）存廃論議の内容

東田第一高炉は，1901年の官営製鐵所の設置とともに操業開始を担った高炉であるが，技術の発展とともに大幅な改修が行われてきた。1901年の火入れから10回の改修を経たが，1962年の最後の改修で大幅に拡張された。表1から，この1962年時点で高さ，内容積ともに倍以上になったことがわかる。また，高炉はその後1972年に稼動停止し，翌1973年，新日鐵による周辺整備で記念広場となり，その後一般住民に開放された。そしてこの時，当時の新日鐵八幡製鐵所の所長が，

表2 東田第一高炉保存の主な経緯

年	月	分類[1)	関連団体[2)	出来事[2)
1989	9		新日鐵*	高炉解体方針発覚
	10	L	市教委*	文化庁による近代期の文化財調査開始を発表
	10	L	北九州市，新日鐵八幡*	トップ会談「保存の方向で協議」
	10	O	文化財を守る会*→北九州市	保存の陳情書提出
	10	L	北九州市文化財保護審議会	現地視察「保存へ向けて努力」
	11	O	彫刻家フィリップ・キング→市長	保存要望書簡送付
	11	O	文化財を守る会→新日鐵八幡	保存の陳情書提出
	11	L	文化庁	調査結果「サビで修復不可能」
	11	L	北九州市文化財保護審議会	審議会開催「保存すべきで一致」
	12	O	産業考古学会，日本産業技術史学会→新日鐵	連盟で要望書提出
1990	1	L	北九州市，新日鐵八幡	トップ会談「保存の方向で意見一致」
	1	L	九州工業大学教授	現地実態調査実施
	2	L	九州工業大学教授	総合所見提出「腐食がひどく，保存は極めて困難」
	3	O	産業考古学会→北九州市	保存要望書提出
	3	O	日本科学史学会→北九州市	保存要望書提出
	3	O	日本産業技術史学会→北九州市	保存要望書提出
	3	L	北九州市文化財保護審議会	審議会開催「保存困難でも保存の方向を模索」
	4	O	北九州市，市教委，青年会議所*	シンポジウム開催
	5	O	産業考古学会→北九州市	保存要望書提出
	7	L	北九州市→文化庁	保存措置を要望
	12	L	北九州市→文化庁	保存措置を要望
1991	5	L	福岡県	「近代化遺産総合緊急調査」を開始
	5	O	産業考古学会	第15回総会で，保存要望決議を採択
	8	L	北九州市→文化庁	保存措置を要望
	8	O	文化財を守る会，市教委，青年会議所	シンポジウム開催
	8	O	北九州青年会議所	東田高炉を考える懇談会発足，第一回懇談会開催
	8	O	西日本新聞北九州支社	特集「東田高炉への思い」開始
	11	O	西日本新聞北九州支社	座談会開催
	11	O	市教委，青年会議所	第2回東田高炉を考える懇談会開催
1992	1	O	たたら研究会→北九州市，新日鐵，新日鐵八幡	保存要望書提出
	2	O	市教委，青年会議所	第3回東田高炉を考える懇談会開催
	4	L	新日鐵→市	解体を行いたい旨の申入れ
	7	L	北九州市→文化庁	保存措置を要望
	8	L	北九州市→新日鐵	地域文化財保全事業を活用しての保存を提案
	9	L	北九州市議会	八幡区出身議員，議会で高炉保存を議題に
1993	3	L	北九州市，新日鐵八幡	今後の検討課題について協議
	6	L	北九州市→新日鐵	保存の提案を提出
	11	L	新日鐵→市長	正式に解体を行いたい旨の申入れ
	12	O	産業考古学会→北九州市，新日鐵	保存要望書提出
	12	L	北九州市，新日鐵	トップ会談「調査委員会設置，答申を踏まえて結論を出す」
1994	2	L	北九州市	東田第一高炉の今後委員会*設置
	6	L	北九州市	東田第一高炉の今後委員会「保存すべき」と答申
	11	L	北九州市，新日鐵	高炉施設の管理委譲合意
	12	O	青年会議所	第4回東田高炉を考える懇談会開催
	12	O	やはた国際村，八幡21世紀の会	「1901」保存記念講演会開催
1995	2	L	北九州市，北九州都市協会	東田第一高炉保存調査委員会発足
	5	O	産業考古学会→文化財を守る会，八幡21世紀の会	産業考古学会から功労者表彰
	7	L	北九州市，北九州都市協会	東田第一高炉保存調査委員会，基本計画を答申
1996	3	L	北九州市	東田第一高炉跡を市の史跡に指定
		L	新日鐵→北九州市	東田第一高炉本体を寄付
1999	7	O	市教委	一般公開

1) L：メンバーが限定された場，O：自由に行われた活動
2) *の部分は略称。正式名称は次の通り。新日鐵：新日本製鐵株式会社，市教委：北九州市教育委員会，新日鐵八幡：新日本製鐵株式会社八幡製鉄所，文化財を守る会：北九州市の文化財を守る会，青年会議所：北九州青年会議所，東田第一高炉の今後委員会：東田第一高炉の今後のあり方に関する調査委員会

前掲注15) 所収「表1 東田高炉保存に至るまでの主な経緯」に加筆・修正

最初の「東田第一高炉」が稼動し製鉄所が操業をスタートさせた年ということで，高炉に「1901」というプレートをかかげた。

このように，東田第一高炉には過去の時間が複数刻み込まれていることから，その保存をめぐる議論では高炉の歴史性に焦点が集まることとなった。新日鐵は，高炉はほぼ1962年製造のものであり，歴史の浅さゆえ保存する価値はないとした。さらに，多くの人々が保存すべきと声を上げているのは，「1901」というプレートによって，建造物の歴史性を誤解しているからであると説明した。しかし，このように高炉の歴史性を否定する新日鐵に対して，多くの人々が高炉をめぐる過去を積極的に語り，またその大部分がそうした過去を投影しうる高炉を保存すべきであると主張した。

Ⅲ．ナショナルな文脈への包摂

東田第一高炉に対する，現在の代表的な位置づけを2003年に北九州市が作ったパンフレットから見てみる。表紙には「近代製鉄発祥の地・1901日本がここから動き始めた」と書かれ，パンフレット内には「わが国の製鉄の歴史は，明治34（1901）年2月5日，福岡県遠賀郡八幡村に建設された官営製鐵所東田第一高炉の火入れ式とともに始まりました」と説明されている。このように，高炉は日本の近代的製鉄業の歴史を反映するものとして価値づけられており，ナショナルな文脈に位置づけられていることがわかる。こうしたナショナルな次元での高炉の価値づけは，以下に示す状況から，文化遺産として組み込まれていく過程で生み出されたものであった。

1）高炉保存の具体化における住民の不在

高炉保存が決定されるまでの一連の流れを見ると（表2参照），高炉の保存をめぐる動きは，一つは住民らを初めとする様々な意見申し立て，いま一つは市や新日鐵，文化庁，学識経験者らの間で進められた交渉や話し合いと，2つに分離した形で展開したとみることができる。主に住民らが積極的に動いていたのは1992年前半までであり，その時の様々な主張は，市関係者らが「住民らは保存を強く支持している」ととらえ，保存へ向けて行動を起こすことに大きく影響した。しかし，高炉のいかなる価値が保存に値し，どのように保存されるべきかといった高炉保存の具体的決定については，市が中心となり，参加者の限定された交渉や話し合いで決定されていった。

そのことは1994年に設置された[17]「東田第一高炉（1901）の今後のあり方に関する調査委員会」（以下，今後委）に見てとれる。この今後委は高炉保存に大きな影響力をもつこととなった。というのも，市と新日鐵は高炉保存の是非を，今後委の調査・検討に任せ，基本的にその決定に従うとしていた。また保存決定後の1995年に，具体的保存のあり方を検討するために設けられた「東田第一高炉保存調査委員会」（以下，保存委）は，今後委の検討事項の大部分を踏襲した。しかし，今後委には住民らがメンバーに加わっていなかった。メンバーは顧問・委員長・委員合わせて8名，土木工学や建築，技術史，経済，造園などの専門家で占められていた。北九州青年会議所主催の「東田高炉を考える懇談会」（1991～1992，1994年）では事務局を除いた参加者19名のうち，学識者・専門家が8名，行政関係者2名，北九州市内の団体代表者9名であったことと比較すると，すべて学識者・専門家で構成されていたことがこの今後委の特徴として浮かび上がる。これは遊休地活用の計画上，高炉を取り壊す方針であった新日鐵が，専門家の立場から結論づけられた高炉保存の是非には従うとしたことによる。つまりここでは，高炉を価値づける主体に住民を含まないことが，保存の是非の信頼性をより高めるとされたのである。

2）「近代の文化遺産」とナショナルな文脈

高炉存廃問題の動向は，文化庁による「近代の文化遺産」というカテゴリーの創出および確立と平行していた。ただし，高炉はもともとこのカテゴリーに自然と結び付けられたわけではなかった。これはⅡ3)で触れたように，高炉が1962年に大幅に改修されており，その時点での建造物としてとらえられる点にあった。というのも，文化庁が「近代の文化遺産」の枠で設定していた対象時期は，建造物としては建造後50年を経過していること，史跡としては第二次世界大戦終了までとされていたことによる。そのため，建造物ではなく，場所（史跡）としての側面が強調され，「近代の文化遺産」へのカテゴリー化がなされようとした。例えば，先の今後委は，「現在の高炉は，…1901年にできた高炉ではな」く，その「遺産的な価値」は「わが国近代製鉄業の発祥の地がこの施設を中心に存在してきた事実」にあるとし，建造物ではなくその場所にもとづく歴史的価値を報告書[18]の冒頭に記した。さらにその後の保存委は，報告書[19]の冒頭で「近代化遺産」を「日本の近代化に貢献したもの」と説明し，続けて「東田第一高炉は1901年（明治34年）にわが国で初めての本格的な近代一貫製鉄高炉として火入れされた場所に建つものであり，市民にも強い印象をあたえ続けてきた産業遺産である」とした。こうした1901年の創始ということが優先され，建造物から場所（史跡）に焦点が移されることで，高炉は「近代の文化遺産」にカテゴリー化されていった[20]。

この背景には，保存費用の捻出があった。北九州市は高炉保存を実現させるため，国による文化財指定への働きかけを幾度も行っていた。新日鐵の高炉取り壊し方針が明確になった1989年10月，北九州市教育委員会は文化庁に対して，産業交通土木関係施設という位置づけで国指定による高炉の保存が可能かどうかを打診していた。そして1989年11月には文化庁建造物課による現地調査が行われたが，高炉保存は技術的に困難であるとされた。それでも市教委は1992年7月まで再三にわたり文化庁に対し要望を行っていた（表2参照）。

その後地域文化財保全事業制度[21]の財政援助を活用し，高炉の存在する場所を市の指定史跡とすることで整備を実現させることとなった。この方針は，1992年9月には具体化されていた[22]が，その後もいずれは国の重要文化財指定へと格上げすることが考えられていた[23]。

また，先の今後委においても「我が国の近代化への基礎となった製鉄業の記念としての高炉の保存は，一企業，一都市レベルを越えた国レベルの歴史的遺産と考えられるため，国の支援等が図られる努力を行う」[24]ことを今後の高炉保存の課題として第一にあげている。

ことに高炉などの大型の産業施設は保存費用が多額になる。地方自治体では少しでも整備費の軽減を図るため，必然的に国の文化遺産という枠組みでの保存を検討したともいえる。いずれにしろ，こうした国家的措置を求めていく中で，当然ナショナルな次元で高炉の価値づけがなされていったといえる。1996年3月，市の史跡指定が決定された際，指定理由は以下のようになっていた。「東田第一高炉跡は，明治の富国強兵政策の代表である「官営八幡製鐵所」の最初の溶鉱炉が設置された場所であるのみならず，技術の進歩を基盤に，明治以降の日本近代化を支えてきた象徴的な場所である」となっており，明確に「日本の近代化遺産」としての位置づけがなされていた。

以上のように，高炉の具体的かつ公的な価値づけにおいては，ローカルな視点が不在であったことや「近代の文化遺産」の制度的枠組みの適用がナショナルな次元とリンクしていたことが指摘できる。高炉は公的にはナ

ショナルな文脈へと包摂されていったとみることができ，ゆえにローカルな文脈における位置づけは表面化しづらくなった。以下ではローカルな視点でとらえられていた高炉の価値がいかなるものであったのかを探ることとする。

Ⅳ．ローカルな価値の投影

ここでは，西日本新聞で「東田高炉への思い」という題で特集された記事を分析の対象とした。のべ45名分の高炉存廃をめぐる意見が掲載され，1991年８月から同年11月まで連載された。当時西日本新聞北九州支社の編集長，デスク，記者によると，この特集は基本的に取材によるものであるが，投稿されたものもあり，得られた意見はすべて掲載したとのことであった。

１）様々な時代軸

高炉には，1901年時点のみならず，様々な時期の事柄が反映されていた。表3-1がここで取り上げている主張の詳細である。

A 19世紀末～戦後

官営製鐵所の設置期から日本製鐵株式会社を経て戦後に至るまでの時期のことを指すもしくは示唆しているものは，①，②のように，鉄都の繁栄や北九州固有の歴史といった形でより一般的かつ肯定的にとらえるものと，③，④，⑤のように地域住民の犠牲が強調されるものがある。これは製鉄所設置期の用地買収および製鉄所拡張に伴う洞海湾の埋め立てにおいて，農民や漁民が犠牲となってきたことを示している。

B 1950～1960年代

戦後，八幡製鐵株式会社となってから，生産量の飛躍的拡大とともに最大となる時期（表１参照）のことを主張する場合，⑥，⑦のように活況を呈していたとして，あるいは郷愁の対象という形で語っているものが多い。また，⑧のように，公害がひどかったことについての語りも見られた。

C 1970年代以降

1970年合併により新日鐵となってから以降のことは，活況がなくなっていく状況や新日鐵による地域軽視のことなどが語られている。ここでは否定的あるいは新日鐵に対し批判的であることが特徴である。地域を「ないがしろ」にする，あるいは地域への「間借り意識」といった言葉で，新日鐵の現在までの方針を批判している。M所長の引退（1978年）はそこに拍車をかけるものとし（⑫），スペースワールドが地元への利益をもたらさない点についても関連づけられる（⑩）。また高炉保存に消極的な新日鐵の姿勢そのものも，地域を軽視するものであると批判がなされた（⑩，⑪，⑫）。

D 1980年代後半

1980年代後半のことも幾つか語られていた。⑬の語った国際鉄鋼彫刻シンポジウムや⑭の挙げるコンサートなど，地域において行われたイベントである。どちらも新しい試みであり，この時期に特徴的な地域の取り組みであった。

以上のように，非常に広い時代幅で，しかも多様な過去が語られていた。注目すべきは，高炉が稼動し活況を呈していた繁栄の過去のみならず，製鉄所による搾取，公害や活況のなくなってしまった地域の状況といった，いわば「負の記憶」ともいえる過去や，1980年代後半の地域の取り組みなど，非常に近い過去の事象が語られていることである。こうした過去を語ることによって高炉保存を訴えるというのは，どういうことを意味しているのか。以下でもう少し掘り下げて考えたい。

２）製鉄所と過去に対する批判的見方

まず，否定的あるいは批判的に語られるものには，ある対立的な見方が根底にあることを指摘できる。それは製鉄所の活動対地域社

表3-1 西日本新聞特集「東田第一高炉への思い」における主張 ― 時代毎

上段データ：(語り時の) 主張者の　性別／居住地／年齢／職業

時代	主張
A	①男性／北九州市小倉北区／41／博物館副館長 官営八幡製鉄所が明治時代の近代日本の礎だったことは，義務教育でだれもが学習すること。固有の記憶は八幡にとっても，北九州にとっても欠かすことはできない。
	②男性／北九州市八幡東区／不明／住職 龍潜寺（八幡東区祇園原町）の境内の一角に…ドイツ人技師の墓があります。墓石には「明治三十四年来日。官営八幡製鉄所の建設，操業の指導をし二年後，帰国の夢かなわず八幡の地で亡くなった」との碑文が彫られています。…墓石の前に立つと，鉄都繁栄の礎を築いた人々の夢と苦悩の入り交じった息遣いが聞こえるようで，心を打たれます。
	③男性／北九州市若松区／69／図書館長・郷土史家 八幡製鉄所建設のため，八幡村の農民は二十万坪の土地を一坪五十銭という格安で売った。それも「お国のため，県の発展のため」という半ば“恫喝（どうかつ）”だったという。
	④女性／北九州市八幡東区／39／放送ナレーター 寒村だった八幡が日本を代表する「鉄の都」になったのは，種義[1]をはじめとする当時の村民たちの犠牲があったからだということはだれにも否定できないはずです。
	⑤男性／北九州市八幡東区(勤)／42／大学教授 第一次大戦後，内務省の指示で製鉄所は拡張を重ねている。…洞海湾をどんどん埋め立てていって，大正時代には漁民に漁業権を放棄させた悲しい歴史もある。
B	⑥男性／北九州市八幡西区／65／コンサルティング会社社長 私は…昭和三十一年に黒崎に出て来ました。そのころは，事務所から見上げる空には工場の煙突群から煙がもくもくと上っていました。あの「七色の虹（にじ）」を思い浮かべる度に，私には東田第一高炉が八幡の戦後の復興のシンボルに思えます。
	⑦男性／北九州市小倉北区／44／画家 父が製鉄マンで，八幡駅近くの平野町にある製鉄の社宅に住んでいた。小学校のスケッチ大会では煙をもくもく上げる煙突と，そばにそびえる東田第一高炉を，描いていた記憶がある。…製鉄はまさに日常生活の一部だった。
	⑧男性／北九州市八幡西区／45／有限会社社長 「1901」のプレートを付けて今もそびえ立つ東田第一高炉は，幼いころから工場の煙突軍に囲まれ，ばい煙だらけの空気を吸って育った土地の者にとって，企業城下町の“天守閣”そのものの存在としか映りません。
C	⑨男性／北九州市小倉北区／44／画家 しかし，一九七〇（昭和四十五）年の富士製鉄との合併で「新日鐵」と名称が変わり，君津へ従業員の大移動がその後も続いた。社宅でも空き部屋が目立つようになって仲の良かった友達とも離れ離れになった。
	⑩男性／北九州市八幡東区／50／画廊経営 新日鉄は合併以来，地元をないがしろにしてきた感がある。…スペースワールド[2]にしてもそうだ。…地元から完全に遊離している。…新日鉄の中で八幡の位置づけは年々低下し「1901」などの歴史的構造物までも壊されようとしている。こうした動きは，鉄とともに歩んできた八幡の歴史を奪い去るのと同じだ。
	⑪男性／北九州市八幡東区／66／古民芸品店経営 八幡製鉄所から新日鉄になり，鉄冷えが言われて，鉄の街もかなり様相が変わりましたが，かといってそのシンボルをないがしろにしていいものでしょうか。
	⑫男性／北九州市／51／販売会社社長 しかし，M[3]さんが引退され，製鉄所サイドに市民と一体となる姿勢が希薄になった印象を受けるのは私だけではあるまい。東田高炉を残す，残さないといったこんな議論が出ること自体が，そのなによりの証拠ではあるまいか。地域への“間借り意識”を捨てて，市民との一体感にあふれたあの「M精神」を思い起こしてほしいと願わずにいられない。
D	⑬男性／宗像市／64／会社社長 シンポ[4]の最終日の風景は今も忘れられない。広場でロックコンサートがあったが，薄暮に浮かび上がった東田高炉のシルエットの素晴らしさ。年寄りにロックはちょっと…と思っていたが，男らしい鉄の構造物とたけだけしい音楽とがよくマッチして，雰囲気を盛り上げていた。
	⑭男性／北九州市八幡東区／不明／住職 この数年，市の活性化へ向けた動きも活発で，北青会[5]も呼応するようにコンサートや「アジア・キッチンフォーラム」などに携わりました。

注1)官営八幡製鉄所設置時の八幡村村長。
注2)表1注2)参照。
注3) 1972年～1979年まで八幡製鐵所所長を務めた人物。東田第一高炉記念広場を開設した。
注4)国際鉄鋼彫刻シンポジウムのこと。表1注1)参照。
注5) 社団法人 北九州青年経営者会議。1961年設立。市内の20-40歳の経営者で構成され，主に地域活性化を目的として活動を行っている。(北九州青年経営者会議ホームページによる。http://www.hokuseikai.com/)

表3-2 西日本新聞特集「東田第一高炉への思い」－ 過去の否定

上段データ：(語り時の) 主張者の　性別／居住地／年齢／職業

主張
⑮男性／北九州市小倉北区／41／博物館副館長 長い間「産業都市」「生産都市」として栄えた北九州には，経済最優先の考え方がすっかり浸透しているようだ。言い過ぎかもしれないが「お金にならないものは不要」とする悲しい風潮すら残っている。…一見，無用とも思える「1901」だが，「鉄の町」のシンボルとして残すことが“文化の砂漠”の汚名を返上するきっかけになるのではないか。
⑯男性／北九州市小倉南区／45／行政関係者 北九州市はこれまで，猛煙を吐き，モノをつくるだけで，住む人のことなど考えていなかった。生存のための手段である工業生産では優れた半面，生存の目的に関しては非常に遅れていた。
⑰男性／北九州市八幡西区／37／印刷会社社長 なぜコンサートにこだわるかというと，北九州を文化の薫る街にしたい一心からです。北九州市にはタレント，アーチストの来演が少ない。それはステージが成功しないからで，…市民にお金を出してまで見に行く，聞きに行く習慣がないからです。こうした風潮は，実は新日鉄八幡製鉄所など北九州市の大企業が長い間につくり上げたと言っても，言い過ぎではないと思います。…福利厚生面に恵まれていて，チケットなどは企業が買い与える。チケットの購入をお願いに行っても「買えば損，どうせ会社が一括して買ってくれるから」という返事が平気で戻ってくるのですから。

表3-3 西日本新聞特集「東田第一高炉への思い」における主張 －「文化」と地域

上段データ：(語り時の) 主張者の　性別／居住地／年齢／職業

主張
⑱男性／遠賀郡／47／彫刻家 東田高炉を残さないと北九州の文化は残せない。…素材としての鉄は世の中からなくなることはないが，北九州から鉄の工場はなくなるかもしれない。しかし文化が残れば，工場はなくなっても，残った文化は常に新しいものを生み出し続けるもので，また町は栄えることができる。
⑲男性／北九州市小倉北区／42／都市計画プランナー 企業の論理の前には，住民の意識など簡単に切り捨てられがちだ。ただそうなったら，文化も何もなくなる。
⑳男性／北九州市八幡東区／50／画廊経営 地域が一体となった取り組みが必要だろう。スペースワールドを見て思うのは，科学で人を呼ぶには限界がある，ということ。多くの人を集めるには文化の薫りが必要だ。「1901」にはその薫りがある。

会であり，前者を地域社会と相容れないものとして否定する。これはAの近代国家形成期の製鉄所設置・拡張における住民らの犠牲，そしてBの経済成長期の活況の下での公害の負荷，さらにCの新日鐵発足以降の地域社会の軽視として，それぞれ見たものである。このように様々な歴史的事象に，製鉄所の活動対地域社会という構図が反映されている。

そして，この対立的見方は，地域におけるこれまで（過去）と未来という時間軸にも適用されている。製鉄所の活動が最優先された，これまでの地域社会は，「文化」や「生存」という人間的側面で非常に遅れていたものとして否定的にとらえられている。表3-2で見ると，⑮，⑯は企業の経済・生産活動に特化していた事を，⑰は大企業の過剰な福利厚生の慣習を，地域住民らの文化活動の可能性を狭めてきたものとして批判している。

3）時代変革のシンボルとしての高炉

では，こうした製鉄所や地域の過去への否定と高炉の価値とはどうリンクするのか。それは地域における時代変革のシンボルとしての意味を持っていたことにある。つまり，製鉄所に依存することのない，主体的・自立的な地域社会への変容を可能にするための拠り所であり，住民らが生きてきた時間とこれからの生きていかなければならない時間とをつなぐ，要としての価値を付与されたのである。例えば表3-3で⑱は，「工場はなくなって

も，残った文化は常に新しいものを生み出し続ける」とし，「文化」の象徴を高炉に見ている。また，高炉を残さないと「文化」は残せないとまで言っており，高炉と「文化」，そして地域の自立が密接にリンクしていたことが指摘できる。これは表3-3の⑲，⑳からも同様のことがいえる。そのために，1980年代後半の住民らの文化的取り組みという近過去の事象も高炉に反映されていたといえるだろう。

Ⅱ1）で見たように，当時は1987年の新日鐵の大規模合理化に伴い，大企業による地域支配の終焉と地域の自立が促された時期であった。これまでを郷愁をもってとらえるにしろ，否定的にとらえるにしろ，未来へ向けての変革の意志が地域社会に強くあったと見ることができる。

このように高炉は，ローカルな次元では，地域社会の時代変革のシンボルとしての意味合いが強かったととらえることができ，Ⅲのナショナルな文脈での高炉とは大きく異なっていることがわかる。

Ⅴ．ローカルな価値の再生産

では，保存処置の施された現在の高炉に対して，住民らはどのように見ているのだろうか。そもそも当時積極的に保存へ向けて活動していた人々は，現在の高炉が「保存」されたのか否かという点で様々な意見を持っていた。ここではローカルな視線において，保存処置後の現在の高炉に納得しきれない状況と，それでもなお納得しようと新たな価値づけをおこなっている状況について論じる。なお，インタビュー・データはすべて斜体字とし，末に（性別/語り時の居住地/語り時の年齢/語り時の職業）を付けた。

1）ローカルな視線と「保存」

高炉というのは，鉄を作りだす炉本体の部分，および炉本体へ高温の熱風を大量に送り込む熱風炉など様々な付帯周辺設備を伴ったシステムである。表4に大まかにまとめたが，こうした付帯設備が残っているのか否かという細かなこだわりから，高炉が「保存」されたといえるかどうかが住民らに問われていた。例えば，炉内の冷却に使われた給水塔は，炉本体や熱風炉からは離れており，計画された高架道路にかかる場所にあったため，撤去された。製鉄所OBは，これがなければ高炉は成立しないと語った。こうした細部へのこだわりは，当然産業技術の専門家や芸術家らにも見られたが，周辺で暮らす住民にも見られるものであった。例えば高炉本体に付随する傾斜塔にこだわった住民は以下のように述べる。

これ一体なんですよ。…ていうのは，こ

表4　高炉の設備詳細

設備		状況	保存決定後の措置
高炉	外形		部分補修・塗装
	炉体	老朽化激しく危険	解体・撤去・復元
	その他付帯設備	老朽化激しく危険	解体・撤去・復元
	「1901」プレート		撤去・復元
	傾斜塔		部分補修・塗装
周辺設備	熱風炉及び付帯設備		一部撤去・部分補修・塗装
	煙突		部分補修・塗装
	鋳床		部分補修・塗装
	給水塔	高架道路建設予定地	解体・撤去
緑化・植樹地帯		常緑樹・ツツジ・サクラなど	伐採，更地化

前掲注9)，19）および北九州市教育委員会資料，聞き取り調査より作成

れでもって鉄鉱石を上にあげ，石炭石も上にあげよったんです。…これがなくなると，どっからいれよったかわからんじゃないか。（男性/八幡東区/80代/まちづくり組織代表）

これは高炉が稼動していた，あるいはそれにより地域が活況を呈していたという過去の反映ととらえることができるだろう。

このように，「保存」といっても各主体によって異なっており，それは高炉の価値づけとも連動している。ことに，ローカルな価値を反映させた物的様相と，現在の保存処置後の状態とのずれが顕著に現れた点を植樹帯に見てみよう。これは1973年公園として整備された時に作られたものであり，1990年代初頭には図1のように，樹木が成長し，緑のうっそうと茂る中に高炉が存在する形となっていた。それが保存後には図2のような形で伐採

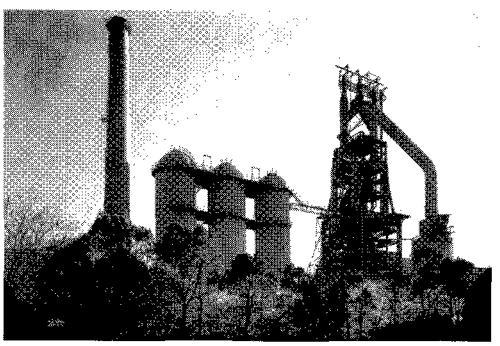

図1　保存整備前の高炉
（写真提供：福博総合印刷株式会社）

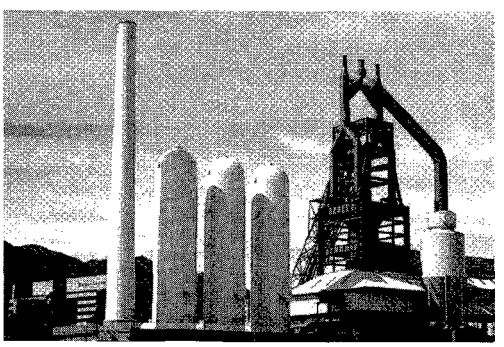

図2　保存整備後の高炉
（写真提供：北九州市教育委員会）

された。現在の状態は保存処置以前からすると大きく変化してしまったととらえる住民らが多く，中にはそれを復元しようとする動きもある[25]。地域において，これほどまでに高炉と植樹帯が関連づけられているのはなぜかという点で，以下のような語りがあった。

あれが休止になったときは，…公害問題がひどかった。で，…企業もどうにかしないといけないということで，…そのいわゆる反省点の気持ちを込めて，あそこを緑の公園として残した。だからたくさん木を植えたわけよ。（男性/田川市/47/彫刻家）

つまり，この植樹帯は単なる公園として適当なものというよりは，公害をもたらしたことに対して，企業が反省をしたという過去の事実を反映するものであり，この高炉とは切り離せないものであったのである。

2）高炉への新たな価値づけ

以上のように様々な過去を各々の付属施設に投影していたにも関わらず，そのモノが取り払われたために，現在の状態に対して異議を唱える人々もいる。しかし，それでもなお新しい価値づけを行い，この状態にある一定の納得を得ようとする状況も見られた。

まぁ何にしろ，製鉄所に対して異を唱えてどうのというのはこれまで全くなかったことだね。製鉄所は最初からどうしてもつぶすつもりだったわけだから，市民がたてついて残したというのは画期的なことだったわけだね。（男性/八幡東区/60/サービス業経営）

すなわち，製鉄所の決定に対し市民が抵抗しその決定を覆したという，地域の歴史において画期的出来事を反映するものとして，高炉は新たに価値づけられているのである。

このように，保存後のインタビューからも，高炉のナショナルな文脈での価値づけとはまた別のローカルな価値づけが明らかとなった。植樹帯に付随した公害に関する語り

にしても，現在の高炉に新たに付与された価値にしても，高炉は製鉄所と地域という対置的関係において地域が優位に立ったことのシンボルとしてとらえられている。高炉の表面的様相が変化しても，地域の自立の象徴としての意義は新たな形で継続していることが指摘できるであろう。

Ⅵ. 結論

以上，東田第一高炉をめぐる価値づけについて，ナショナル／ローカルという視角から整理し，その実態をとらえた。ナショナルな文脈への包摂においては，保存の具体化が基本的に専門家の間で，つまり住民らの不在の中で行われたこと，制度としての文化遺産へのカテゴリー化がナショナルな文脈へとリンクしたこと，そしてそこには保存費用の捻出が密接に関連していたことが明らかとなった。いわば，通常文化遺産が創造される際の制度的手続きが，ナショナルな文脈とつながっていることを指摘できた。また，ナショナルな文脈では1901年に限定されてしまいがちな，高炉に投影される過去は，ローカルな次元においては，ごく近年の過去に至るまで，非常に幅のある時間が投影されていた。特に製鉄所の生産活動を担ってきた高炉の保存を主張するにも関わらず，製鉄所の活動を批判し，かつ地域社会の過去も否定していたことが特徴的であった。これは，地域社会の歴史を反映するもの，かつ時代変革のシンボルという価値づけが，高炉には可能であったためである。こうした見方は，公的に見られるナショナルな位置づけとは大きく異なる。また保存整備後，植樹帯の伐採など，これまでの地域独自の過去が反映しえない状態になっても，地域社会が自立した第一歩の証という，新たな価値づけがなされていた。またこの価値づけは存廃論議中に付与された地域社会における時代変革のシンボルという価値の延長線上にあるといえ，一貫したローカルな位置づけをとらえることができる。

このように本稿では，文化遺産の制度的状況や地域社会での動きを踏まえつつ，高炉の価値づけをめぐる，ナショナルへの包摂とローカルな次元での独自の価値づけについてとらえた。双方を同時にとらえることで，それらの間には根本的な齟齬があることも明確となった。抗い難いナショナルな文脈への包摂にも関わらず，地域においては独自の価値，位置づけが根強く存在することを示した点は意義深いと考える。ことに地域重視をうたう近年の文化遺産制度においては，ナショナリズムの媒介である「地域」ではない，ローカルな側面が重視されなければならないであろう。本稿がその試金石となればと考える。

ただし，今回はナショナル／ローカルという二項の中でとらえたが，グローバルな動きも別の意味で重要であるといえる。既に本事例でも高炉の芸術性などグローバルな次元での価値が重要な意味を持っていたことがとらえられている。特にローカルな見方や動きとリンクする傾向にあった点を中心に，今後早急に取り組んでいきたい。またグローバルな動きとも関連するが，本稿においては，文化遺産をめぐる現象で極めて重要な側面の1つでもある，遺産産業やツーリズムについては全く触れていない。そして文化遺産の，景観や博物館という独自な側面についても今回触れ得なかった。それぞれの研究の厚い蓄積のもとに，十分な考察を加えた成果は，今後の課題としたい。

（お茶の水女子大学大学院・院生）

〔付記〕

本稿を作成するにあたり，現地調査におきまして，北九州市でご活躍されている方々に多大なご協力をいただきました。ことに（財）北九州市国際技術協力協会元理事長の故水野勲氏をはじめとし，1990年代の北九州市行政関係者で

ある出口隆氏，大神誠氏，そして千草ホテルの小嶋一碩氏には，ご多忙の中，多くの時間を割いてご協力頂きましたおかげで，実態の解明が可能となりました。皆様への感謝の意を申し上げます。

〔注〕

1) 近代産業景観に関連する文化遺産的カテゴリーは様々な分類，名称が存在する。本稿では，設定した近代産業景観に文化遺産的価値が付与されることを“近代産業景観の文化遺産化”，また付与されたものを“近代産業遺産”と表現することとする。ほかの様々な文化庁や専門家による分類，名称には「 」を付け，区別する。なお，文化庁は，「近代の文化遺産」として記念物，建造物，美術・歴史資料，生活文化・技術と，各課（記念物課，建造物課，美術学芸課，伝統文化課）に準じた4分野からそれぞれ基準設定や保存措置などの施策を行っている（文化庁ホームページ。http://www.bunka.go.jp/）。本稿が近代産業景観という枠でカバーしているのは，4分野のうちの建造物および主に史跡を対象とする記念物の2分野を念頭に入れている。
2) Graham, B., Ashworth, G.J., and Tunbridge, J.E. eds., *A Geography of Heritage: Power, Culture and Economy*, Arnold, 2000, pp181-255.
3) 米家泰作「歴史と場所－過去認識の歴史地理学」，史林88，2005，126-158頁。
4) 堀川三郎「運河保存と観光開発－小樽における都市の思想」（片桐新自・鳥越皓之編『歴史的環境の社会学』，新曜社，2000），107-131頁は，小樽市での運河の保存運動において，運河を取り壊し，道路建設を進める行政側の視線と，保存を主張する住民側の視線とのずれを問題とした。そして，運河に対する両者の視線が，運河を「空間」としてとらえるか，「場所」としてらえるかの違いであると説明した。
5) 荻野昌弘編『文化遺産の社会学－ルーヴル美術館から原爆ドームまで』，新曜社，2002，332頁は，そもそも文化遺産とは「博物館学的欲望」に裏打ちされ形成されるものであるとし，観光や信仰など様々な視線が混在していることを示している。その中で地域住民の見方との齟齬も挙げられ，例として，足尾鉱毒事件で反対運動を展開した田中正造の生家を取り上げ，公害反対運動の祖として神格化しようとする視線に，地域では強い抵抗があることが示された。
6) Hoyau, P.(Translated by Turner, C.), “Heritage and ‘the conserver society’: the French case.” in Lumery, R. ed., *The Museum Time Machine*, Routledge, 1988, pp27-35.
7) 1990年に文化庁による「近代化遺産全国総合調査」が開始された頃から，近代期の建造物の文化遺産としての認識が急速に拡がっていった。ちなみに，この調査に着手していたのは，注1)に示した4分野のうちの建造物分野である。全体的な整備が進められるのは，1994年7月文化財保護企画特別委員会が「時代の変化に対応した文化財保護施策の改善充実について」という報告書の中で近代の文化遺産の保護が新しい視点とされたことからである。1994年9月に「近代の文化遺産の保存と活用に関する調査研究協力者会議」が設置され，先に挙げた4分野毎の調査研究が進められ，1996年7月にそれらを統括した報告が出された（文化庁ホームページhttp://www.bunka.go.jp/）。
8) 斉藤英俊「文化財登録制度導入の意義」，建築雑誌112-1400，1997，26-27頁。
9) 例えば90年代半ば以前に，旧建設省の歴史的建築物等活用型再開発事業や歴史的建築物活性化事業，旧自治省の地域文化財保全事業やふるさとづくり事業などがあった（北九州市・新日本製鐵株式会社『東田第一高炉（1901）の今後のあり方に関する調査委員会報告書』1994，74頁）。
10) 岩本通弥「フォークロリズムと文化ナショナリズム」日本民俗学236，2003，172-188頁。
11) 日本産業遺産研究会・文化庁歴史的建造物調査研究会『建物の見方・しらべ方－近代産業遺産』，ぎょうせい，1998，247頁。
12) Debray,O., “Deindustrialization and museumification: From exhibited memory to forgotten

history.", *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 595, 2004, pp122-133.では，シュネデール社撤退後の，企業主シュネデール氏の邸宅をめぐる動きを論じている。邸宅には，1970年代以降10数年にわたり，まずヨーロッパあるいはフランス国内の動きと連動するエコミュージアムや企業支配の終焉という文化・政治思想が付された。ただし，地域住民では畏怖の念が強く，そうした位置づけに抵抗を感じる人々が多かった。1980年代，邸宅は通常の博物館になり，1990年にシュネデール氏の私物を中心とした展示が行われた際，ほぼ全てといっていいほどの地域住民が訪れた。Debrayは，これを，地域では支配者の弔いをずっと必要としていたのであり，数十年を経てそれがようやく実現したとしてとらえた。

13) ただし，2001年同地区で開催された北九州博覧祭開催のため，2001年1月～2002年3月の間は一般公開中止となっていた。

14) 東田地区には，第一から第六まで6基の高炉が存在した。1962年に改修された第一高炉は以前の第一，第二高炉の跡地に建設され，続いて1964年に第六高炉も改修された。ほかは1960年代半ばまでには稼動を休止し，第一と第六のみが稼動していたが，1972年にはそれらも休止となった（社史編さん委員会『炎とともに－八幡製鉄株式会社史』新日本製鉄株式会社，1981，266-267頁）。

15) 高炉保存をめぐる経緯については，山本理佳「新聞報道における「市民運動」の構築—北九州市の高炉保存をめぐる動きから－」人間文化論叢7，2005，285-299頁。に詳しい。

16) 総事業費は約7億7千万円，うち地総債（特別分）財源が5億9千6百万円である（北九州市教育委員会資料）。

17) ただし1992年度から委員会は発足していた．その事務局となった北九州都市協会の専務理事を務めた人物によると，これは1994年度に仕切り直された第2次委員会である。

18) 前掲注9)，i頁。

19) 東田第一高炉保存調査委員会『東田第一高炉保存調査委員会報告書 東田第一高炉保存・活用基本計画』1995，i頁。

20) ただし，前掲14)に記したように，1962年改修の新第一高炉はそれまでの第一，第二高炉の跡地に建設されており，厳密にみるならば場所もずれているといえる。

21) 1992年度から開始された旧自治省所管の整備補助制度。国指定，地方指定の文化財の保存整備を目的とした事業を対象とする（前掲9)，74頁）。

22) 1992年9月の市議会答弁で，市長および教育長がこの具体策を提示している（北九州市議会議録1992年9月）。

23) 1993年6月に新日鐵に具体的な保存策を提案した際，市の史跡指定とともに国の重要文化財への格上げが提案事項の一つとなっていた（北九州市教育委員会資料）。

24) 前掲9)，52頁

25) 八幡地区のまちづくり団体は2002年，高炉のすぐそばに桜の木数本を植樹した。

The Evaluation of Modern Industrial Landscapes:
The National / Local Context of the Blast Furnace in Kitakyushu City

YAMAMOTO Rika

In Japan, since the 1990s, modern industrial landscapes, such as blast furnaces and coal mines, began to be considered as part of the cultural heritage. This paper aims to analyze the different evaluations of modern industrial landscapes from the perspective of spatial scales—national and local—through the case study of the preservation of a blast furnace in Kitakyushu City from 1989 to the 1990s.

Generally, modern industrial heritages tend to be evaluated in the national context rather than the local one; these are considered to have facilitated the modernity of Japan. However, the blast furnace has existed in local society and has greatly influenced it. Therefore, in this paper, I address the evaluation of the blast furnace from both the national and local contexts, and investigate two questions—why is there a tendency to evaluate the heritages in the national context and what is the nature of the evaluation in a local context.

In chapter III, I describe the institutional process of how the blast furnace came to be placed in the national scale. First, the preservation of the blast furnace had been undertaken irrespective of the opinions and wishes of the residents. Second, the assimilation of the blast furnace into the modern industrial heritage was inevitably linked to the national context.

In chapter IV, I present an analysis of why the local people desired to preserve this industrial heritage. The residents did not consider the blast furnace as a symbol of modernity but as a symbol of change in the local community. This change implied independence from the steel company, which had greatly influenced the local community for approximately a century. Moreover in chapter V, I show that the blast furnace is evaluated as a symbol of the local community from a new perspective and it conveys the meaning of the independent community even now.

In conclusion, this paper clarifies that there exists a great discrepancy between the national and local evaluation of the blast furnace. It is particularly noteworthy that the unique evaluation in the local context has survived and reproduced despite the powerful evaluation in the national context.

Key words: modern industrial landscape, evaluation of cultural heritage, national, local, Kitakyushu City